

TOPICS
1

トピックス…①

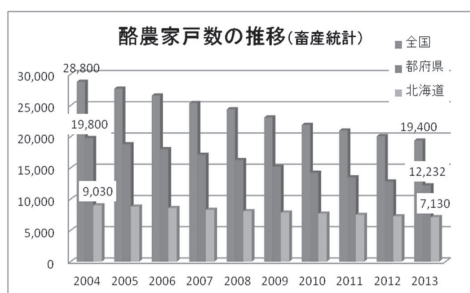
酪農理解醸成のための記者
説明会を開催

本会議は5月29日、東京にて、酪農の理解醸成のための記者説明会「牛乳月間“いま、日本の酪農を考える”」を開催した。酪農理解醸成活動の一環として、飼料価格の高止まりや国際化の進展による将来不安などで離農が続き、生産基盤が脆弱化している酪農の現状、酪農家の生産性向上への努力、牛乳と酪農が果たしている役割、国際乳製品需給の動向などについて紹介した。説明会には報道関係者約50人が出席した。

“岐路に立つ”日本酪農

開会にあたり本会議の迫田潔専務は、「日本酪農は、配合飼料価格の高止まりなど厳しい経営環境の下にあり、先行きが見通せない状況もあって、生乳生産量の減少が続いている。また、国際乳製品市場では需給のひっ迫により価格が高騰し、安定的に輸入しにくい状況もある。6月の牛乳月間を機に、国内酪農や国産牛乳乳製品の重要性を生活者に再認識してほしい」と主催者挨拶した。

続いて、内橋政敏事務局長が資料「生産基盤が揺らぐ日本酪農～飼料価格の高止まり、国際化による不安などで岐路に立つ酪農～」に基づき、①生産コストの増加に加え、T P Pなど将来への不安などから酪農家の廃業が続き、生産基盤は危機的な状況に直面していること、②現在生産を担っている酪農家は、廃業による生産の減少をカバーできない状況にあること、③このままでは乳製品を製造するための生乳が不足し、中長期的には、国内の乳製品需要を満たすことができなくなる恐れがあること等、わが国酪農をめぐる厳しい現状について報告した。



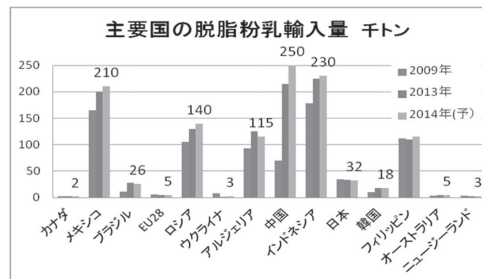
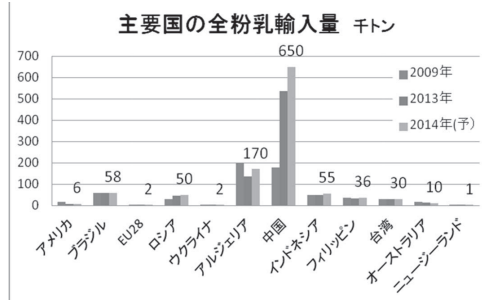
また、牛乳乳製品が米と並ぶ基礎的な食料であること、各種の栄養素をバランスよく含む健康の維持・増進に欠かせない食品であること、牛乳はすべて国産で賄われていること等を強調した。

さらに、酪農経営の安定に向けた国産飼料の増産・有効利用など生産性の向上、環境に負荷のかからない循環型農業(堆肥の水田・畑への還元など)の実践、国土の保全と自然環境の維持、保健休養(農家民宿)・教育の

場(酪農体験)の提供など、酪農が担っている多面的な役割を紹介した。

国内酪農の重要性と課題

資源・食糧問題研究所の柴田明夫代表は、「世界の中の国際乳製品需給の状況と日本酪農市場」と題して、国際乳製品市場は需給ひっ迫を反映して、価格が上昇していることを強調するとともに、日本の食を支えるという観点から、需給変動リスクが拡大する時代における国内酪農の重要性を指摘した。



とくに、中国による乳製品の輸入増大基調に鈍化の兆しはなく、とくに、粉乳類は常温輸送が可能で管理が容易なため、輸入量が急増している。この粉乳類の主要な輸出国はニュージーランドで、同国は国内市場が小さいため、世界最大の乳製品輸出国であり、わが国にとっても重要な輸入先であることを説明した。

また、埼玉県小鹿野町の酪農家・吉田恭寛氏は、「生産現場の現状と未来について」と題して、自らの経験を踏まえて地域社会・経済における酪農の果たす役割を紹介し、酪農家が自信をもって生乳を生産していくためには、経営が安定することに加えて、国内酪農に対する消費者の理解と支持が必要であることを指摘した。とくに吉田氏は、増え続ける離農者と産業構造の変化という酪農生産現場の現状に言及し、6次産業化と輸出促進だけでは解決できない問題があることを情報発信し、理解醸成することの重要性を強調した。